

第 5 回 アートインビジネス研究会 要旨

日時:3 月 14 日(金)18 時~19 時半

会場:同志社大学今出川キャンパス良心館 経済学部棟 3 階第一共同研究室

テーマ:「宮廷のデザイン」

講師:東京国立博物館工芸室長 猪熊 兼樹(いのくまかねき)氏

文学修士(関西学院大学大学院)専門は工芸史、東アジア宮廷文化史。

九州国立博物館研究員、文化庁文化財調査官、東京国立博物館研究員を経て、現職。

代表的な著書は『「旧儀式図画帖」にみる宮廷の年中行事』(東京国立博物館、2018 年)、『宮廷物質文化史』(中央公論美術出版、2017 年)、『有職文様』(至文堂、2008 年)など。

本講演は、東京国立博物館の猪熊先生による「宮廷のデザイン」をテーマに、主に平安時代の宮廷文化、儀式、服装や建築様式について詳細に解説した内容である。特に平安貴族の美意識や儀式の分類、衣装の色彩規定、宮廷の建築構造、さらには時代の変遷による文化の変化について包括的に述べられている。平安時代の宮廷文化を多角的に解説し、儀式、服装、建築、色彩、社会的背景などを網羅的に示すことで、日本の伝統美と文化の深さを理解する助けとなっている。

平安時代の宮廷文化の概要

講演は、伝統文化の中でも平安文化に焦点を当て、日本の美意識を再発見することを目的としている。宮廷文化は平安宮を中心に展開され、束帯や十二単などの貴族の服装が特徴的だが、現代では馴染みが薄い部分もある。NHK の大河ドラマ『光君へ』が紫式部をテーマにしたことで、宮廷文化への関心が高まっていることも紹介された。

平安時代の儀式の分類

宮廷の儀式は大きく 3 つに分類される。

- 祭祀系(神祕的な祭祀、新嘗祭など)
- 朝賀(中国風の即位礼に関連)
- 公事(内裏で行なわれた日常的な儀式)

特に新嘗祭は農業豊作を祝う最も古い要素を留める祭祀で、11 月 2 番目の卯の日に秋の収穫祭として行う。天皇自身が新穀の米や酒を神に供えられ、食される秘儀である。即位後に行う大嘗祭は一代一度の重要な儀式で、仮設の大嘗宮が建てられ儀式後に撤去される。大嘗祭は弥生時代にまで遡りうる原始的な風俗を再現する意義も持つ。

天皇が即位すると、まず即位礼を行う。即位した後、大嘗祭を行う。宮廷では古くから即位礼というのは漢朝、つまり中国の礼儀作法に習ったものである。大嘗祭は神々の時代の風俗を映すものであるという伝承がある。即位の礼というのは中国風、それに対して大嘗祭というのは純日本風である。

即位礼と朝賀の中国文化との関係

即位礼は中国の漢朝の礼儀作法を模倣し、朝賀は元旦に天皇が大極殿に上り、臣下が祝賀を述べる儀式であった。平安京の大極殿は国家行事の中心であり、朱塗りの柱や緑瓦、八角形の高御座などが特徴。獣形帽額や四神旗、三本足の烏(太陽の象徴)などの旗も掲げられた。これらは中国文化の影響を受けつつ、日本独自の解釈も加えられている。平安宮という宮廷の部分は大きく二つに分かれていて、朝堂院(外廷)は国家行事を行うオフィシャルなゾーン。一方、内裏(内廷)が君主の私生活を行う場所。この内裏がつまり京都御所に当たる。

宮廷の服装と色彩規定

天皇や貴族の服装は厳密に身分や儀式に応じて決められており、例えば天皇の束帯は白や黄櫨染御袍(こうろぜんのごほう)で、桐竹鳳凰文様が用いられる。臣下は身分に応じて色や模様が制限され、紫式部の時代には位階により黒、赤、緑(のちに縹)の三色に簡略化された。

服装は家柄や位階で細かく決まり、色の重ねや文様も意味を持つ。女性の十二単も身分に応じて文様が変わる。

宮廷建築と生活様式

内廷の建築は寝殿造りである。白木造りの構造で、檜皮葺き屋根が特徴。京都御所は平安時代の内裏ではなく、室町時代以降の里内裏である。オフィシャルな国家の公式行事を行う場所ではなく、皇居、要するに天皇の日常住まいをされる場所。本来の意味としてはプライベートゾーンである。その中でもプライベートゾーンにも正殿とあって、メインビルディングがある。それが紫宸殿である。紫宸殿は儀式の場、清涼殿は日常の住まいであり、板の間に部分的に畳を敷く様式。畳の縁の模様も身分を示す重要な要素だった。天皇の調度品には桐竹の文様が象徴的に用いられた。紫宸殿は、いわゆる純和風と私たちが思い込んでいる畳敷きとか、着物とかそういうのが出てくる前の和風で、素っ気ないものだった。清涼殿の母屋や庇は板の間になっていて、ところどころ座ったりする場所にだけ畳を敷く、全面に畳を敷き詰めない板の間である。

宮廷文化の変遷と社会背景

宮廷文化は鎌倉時代以降、幕府の台頭や財政難により規模が縮小し、応仁の乱を境に多くの儀式が途絶えた。政治と君主の権威が分離し、天皇は権威の象徴としての役割を持ち続けた。武家社会と宮廷文化は並行しつつも、足利義満など武家も宮廷文化を学び取り入れていたが、豊臣秀吉の時代に伝統的な作法が大きく変容した。

色彩文化と染色技術の復元

宮廷の色彩は身分や役割を示す重要な要素であり、特に黄櫨染は天皇専用の染色である。朝賀というお正月の儀式がなくなると、簡単な小朝拝(こちょうばい)というのになる。正月になると、清涼殿で天皇が黄櫨染御袍(こうろぜんのごほう)を着てこられると、臣下がずらっと並ぶ。黒が一番身分が高い色で、赤とか青が身分が低い。もっと身分の低い人は、もう入れてもらえず、身分の高い人と天皇だけの儀式になっていく。

平安時代の染色技術は草木染めが中心で、色の再現は難しく、江戸時代以降に研究・復元が進められた。染料の成分や技術の違いにより色味の差異が生じることもある。

服にはルールがあって、学校の制服のように身分によって着ることができる服の色が決まって

いる。そもそも身分というのは、大きく分けて九段階になっており、まず一位、二位、三位、四位、五位、六、七、八ときて、九位と言わずに初位(そい)と言う。最初に貫う位だから初位と言う。その中でも正一位とか、従一位、四位以下だと正四位の上、正四位の下とかものすごく細かく分かれていて、全部で30位階である。本来のルールでいけば、一番下の従初位の下からスタートするわけだが、家柄が良ければ五位ぐらいからスタートするという格がある。とくに一、二、三位を貴(き)といい、これだけが本当の貴族である。四、五位は通貴(つうき)なので、まあ準貴族と言っていい。我々は平安貴族と言って、平安時代の束帯を付ける人をみんな十把一絡げに貴族と言っているけれども、本当の貴族と言っていいのは三位まで。ちょっと多く見て五位まで多くするのは貴族と言っている。身分ごとに一、二、三位だったら紫を着られる。一だとちょっと濃い。二、三だとちょっと薄い紫。四、五位だと赤。四だと濃くて、五だと薄い。色ごとがあって位が高い方が濃い色になる。そういう人たちがいろいろ入り乱れて、華やかなように見えても、実は身分があって、遠くから見ても、身分が一目でわかるようになっている。平安前期はだいたいこういう恰好をしておって、そして大体五位以上にならないと、綾(あや)と言って模様のある服を着てはいけない。だから、六から下は模様が付いていてはいけない。無地ばっかり。だからそれを選べるようなものではない。いずれにしろ五以上でない模様のある服は着てはいけなかった。

平安時代の感性と季節感

平安時代の人々は自然や季節の移ろいに敏感で、「心あり」「心なし」という表現で季節感の有無を評価した。季節の色彩や衣替えの習慣も厳格で、4月と10月に衣替えが行なわれ、夏服は裏地のない透け感のある素材が用いられた。こうした感性は万葉集の時代から古今集の時代にかけて変化し、秋の感じ方や自然観にも時代差が見られる。

女性は大翳(おおかざし)と言う檜扇を使う。檜の板を継いだ、今の我々が使う扇子とは違って檜の薄い板を連ねた扇を持って、顔を隠すとか、紫宸殿の左近の桜に立って臣下を天皇のところに招き寄せるなどに檜扇を使うことがある。これは大変鮮やかなもので、梅と竹のデザインに源氏雲という金雲を配して、またさらに両端にも飾り糸を付けて、造花を付けるというもの。宮廷には一種作法のようなものがあり、裏側とか箱の内側とか物の裏側には鳥と蝶を散らすという決まりみたいなものがある。扇の裏側には蝶鳥文が行われている。その一番華やかなものが、京都御所の高御座を置いている場所に、賢聖障子(けんじょうのしょうじ)というのがあり、裏側に回ると色鮮やかな鳥と花を散らした模様がある。これがもっともその裏側の華やかなもので、特に錦の花鳥と記して錦花鳥(きんかちょう)と言っている。